風の歌声　-シュル・ヴェレルの手招き-

沢凪　炯

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
風の歌声　―シュル・ヴェレルの手招き―

【Ｎコード】
Ｎ３８７２Ｙ

【作者名】
沢凪　炯

【あらすじ】
風の歌声、第二弾です。書き足りないところが色々ありましたので・・・。
??平凡よりもちょっと下をいくレイリアが、バルクス家へやってきて二度目の春。イルアの抱える秘密を知りながらも側にいる事を選んだレイリアは、相変わらず体力作りなどをしながらも、概ね穏やかに過ごしていた。そんなある日、隣国に不穏な噂のある商人一団”シュル・ヴェレル”が訪れていると聞く。自国に入国する気配はないと安心した矢先、レイリアが拉致されてしまい?!?

第一話　揺らめく安息

レイリアがバルクス家へ迎え入れられて、二度目の春がやってきた。

去年もまた、イルアの誕生日にはたくさんの贈り物が届き、ほとんどが速やかに擁護院（ようごいん）へ送られていった。毎年の事らしいのだが、やっぱりちょっと、贈り主が可哀想に思えてしまう。

が、イルア曰く。

『適材適所よ。その方が無駄がないでしょう？』

と、にっこり微笑まれた。

広い庭の草むしりをしながら、レイリアは外壁に沿って植えられた、白い蔓薔薇を見てぼんやり思いを馳せていた。

（そう言えば・・・エルフィア様、イルア様のお考えを察してこんなにたくさんの薔薇の種を贈られたのかな・・・）

レイリアが来て最初の秋。冬へ移り変わろうとする季節に迎えたイルアの誕生日に、エルフィアはあの白い蔓薔薇の種をたくさん贈ってきたのだ。城の庭師に聞いて白い蔓薔薇だと判明した時、どこへ植えようかうきうきしていたレイリアに、四人は言った。

『侵入者避けにぴったりだ！』

と。

その用途に少々がっくりしたレイリアだったが、種が芽吹いて蔓が煉瓦の壁に沿って伸び出すと、その風景の綺麗さに感嘆した。
（よし・・・！お庭へ出たら一息つきたくなるように、綺麗にしてみせる・・・！）
そう決意して、今日もせっせと草むしりに励んでいる。
（そう言えば・・・）
手を動かす側からあれこれと思いを馳せてしまって、広い庭の草むしりが五日以上かかってしまうのはこのせいだと、後になって落ち込むのは自分なのだったりする。
（イルア様、エルフィア様と遠乗りに行かれる事もあるけど、たまーにシールス様とも行かれるのよね・・・。ひょっとして・・・）

「レリィ？」
「わっ！」

突然、至近距離で声をかけられて、驚いて飛び上がり、尻餅をついた。
「いた・・・」
「大丈夫！？ごめん、びっくりした？」
ひょい、と軽々レイリアを引っ張り起こしたのはヴィトだ。見た所そんなに力持ちには見えないのだが、かなりの力持ちだ。
「うん、びっくりした・・・ありがとう。」
「痛い？」
心配そうに聞かれて、大丈夫、と微笑んだ。
「それで、何をぼんやりしてたの？」
聞かれて小さく笑う。
「あの蔓薔薇ね、たくさん種を下さったでしょう？エルフィア様が。」
「うん、そうだね。」
言われてヴィトは、まだ若い蔓薔薇を眺める。細い蔓に小振りの

薔薇を咲かせる様は、なんだか奥ゆかしく思えて、すぐに愛着が沸いた。
「皆はすぐに“侵入者避けに”って言ってたでしょう？」
くすくす笑い出したレイリアに首を傾げ、ヴィトは頷いた。
「・・・うん。それがどうかした？」
「うん、あのね・・・エルフィア様は皆がそういう事を見越して、たくさん種を下さったのかなぁって思って。」
言われてヴィトはきょとんとした後、一緒に笑い出した。
「きっとそうだね。あの方もイルア様と同じように“対・〜”って考えが基本だから。」

エルフィアの贈り物はいつもそうだ。可愛らしい意味だとありはしない。
シレイ？豹の様な、真っ白な毛並みに茶斑の模様を持ち、緑の目をした美しい獣だ？をイルアへ贈った理由とて、“イルアに色惚けする野郎どもを蹴散らす為”だったりしたのだから。あいにくとそのシレイはリュミエルと名付けられ、レイリアを主人としてしまったが。

「考え方が似ているから、とっても仲が良いのよね、お二人は！」
まるで自分が言われたかのように、レイリアはとても嬉しそうに笑う。それを見て、ヴィトはちょっと心が疼く。

レイリアはいつもそうだ。自分の好きな人が幸せである事が、心から笑顔である事が、彼女の喜びなのだ。だから、その笑顔は温かく、見ていると心から癒される。

「レリィもお二人と仲が良いじゃないか。」
「え？」
言われてレイリアは驚き、そして、嬉しそうにはにかんだ。

「そ、そう？・・・そうかなぁ・・・」
（そんなに嬉しそうに・・・）
ヴィトは思わず視線を泳がせた。じっと見ているとまずい気がする。
「さ、早く今日の分を終わらせよう。俺も手伝うよ。」
「あ、うん。ありがとう！」
これまた嬉しそうに微笑まれて、ヴィトもにっこり笑い返した。
「今日はセツキに乗るんだっけ？」
言った途端、レイリアはぎくり、と見を強ばらせた。ちなみにセツキというのは馬の様な獣で、しかしその身体は肉食獣のそれであり、鋭い牙もあれば、足には蹄ではなく五本指があり、鋭い爪がしっかりと地面を掴む。そんな獣に乗るんだろうと言われ、レイリアはぎこちなく頷いた。
「う、うん・・・」
その緊張ぶりを見て、ヴィトは騎獣舎を眺めやった。
（これはまた、ガイアスが苛々しそうだな・・・）
元が軍人だったからなのか、ガイアスは教えるとなると鬼だ。人よりのんびりした性分のレイリアは、みっちりしごかれる羽目になっていた。

「はあ・・・」
「お嬢様。溜息など、淑女のする事ではありませんよ。」
「分かってるわ、セティ。けれど出てしまったのだから仕方ないでしょう？」
「では、せめてお屋敷に戻るまではお止めください。」
「・・・はーい。」
にこりと微笑んでお説教をするセティエスに、イルアは肩をすくめた。しかしセティエスの小言がなければ、イルアが“お嬢様”で

いられるかどうか疑問だ。
「でもねぇ、セティ。貴方も嫌な気分にならない？」
そう言って少し後ろを振り返ると、セティエスが困ったように微笑んだ。
「シュル・ヴェレルの事ですね。」
全国を巡り行く商人一団、シェル・ヴェレル。その一団が通った後は、必ず何か事件が起こっているのだ。疑わしいにも関わらず誰も裁けないのは、例えば現場が、彼らが絶対に立ち寄れない場所であったり、彼らと関わりがない者が被害者だったりするからだ。
それなら何故、彼らが疑われるのかというと、全員、現場(アリバイ)不在証明があるにも関わらず、何故か現場で似た人物が見かけられているからだ。

「胡散臭いわよねぇ・・・」
不機嫌そうに細められた瞳は長い睫毛に縁取られ、何人もの異性を虜にする魅力がある。しかしそのイルアを幼い頃から知っているセティエスには、それほど魅了の効力はない。それに、鋭い眼光は“お嬢様”ではなく“悪魔(レーヴェ)の蜜”のもの。なので。
「お嬢様。そのような言葉を選びませんよう。」
特に考えもなくするりと窘める言葉が出てきた。
「むー・・・分かってるわ。」
「本当ですか？」
疑わしげに見やると、イルアはにこりと笑ってごまかした。ついでに話しを戻す。
「だって、セティ。隣国に今来ているのよ？やっぱり少し不安じゃないの。」
「それはそうですが・・・今の所は何も起こっていないと、陛下も仰られていたではありませんか。」
「今は、ね。だけどこの前は三つ程向こうの国で、やっぱりシュル・

ヴェレルが通り過ぎた後に事件が起こっていたじゃない？」
「・・・確か、若い娘が数人、行方不明になったのでしたね・・・」
セティエスは細い指を顎にかけ、しばし考え耽る。そんな様子に惚ける娘が何人いただろうか。だがこちらも、長く共にいるイルアにとっては、そう魅了されるものでもない。
「まあ、今のところはこちらへ入国する動きもないようだから、そんなに警戒する必要もないわよね。」
そう言って苦笑するイルアに、セティエスも微笑んだ。
「そうですね。取り越し苦労は止めておきましょう。」

そう。レーヴェは自国の不祥事を片付ける為にいる。不穏な噂ある商人一団に、必要以上に警戒する必要もないし、所詮は商人だ。全力で調査する事があればすぐに正体を明かせるだろう。
だから、そんなに警戒する事もない筈だ。

？？そう、思っていた。

第二話　バルクス家の日常

いつものように五人一緒に朝の食事を取っていた。穏やかに、和やかに流れる時間がとても幸せに感じられて、レイリアはついつい頬が緩む。

「やっぱりレリィを見てると癒されるわねぇ。
それを見たイルアも頬が緩む。
「本当ですね。」
セティエスがいつものように同意した後、とんでもない事を言い放った。

「手ずからあげてみたくなりますね。」
「「「「っ！？」」」」

しん・・・と静まり返る部屋。かたん、と誰かの食器が滑り落ちた。

「・・・何か、おかしな事を言いましたか？」
わざとなのか本当にそう思っているのか、セティエスは不思議そうに瞬いた。
「餌付けか・・・？」
ぼそりと呟いたガイアスの顔色は悪かった。そんな様子に気付く事はなく、セティエスはさらに言った。

「可愛いではないですか。かなり癒されると思いますよ？」
「「「「！」」」」

真面目な顔でそんな事を言うものだから、危険だ。イルアが慌てて立ち上がった。
「セティ！もう登城しましょう！今日は早めに行きたい気分だわ！」
「お嬢様・・・マナーが悪いですよ。」
「いいから行くわよ！」
「・・・かしこまりました。」
しぶしぶ立ち上がったセティエスの腕を引っ掴んで、イルアは玄関へずんずん進む。慌ててヴィトが立ち上がって見送りに行くが、レイリアは動けなかった。
「・・・・・・・」

あまりの発言に、免疫力皆無だったせいで完全に固まってしまったのだから。それも、真っ赤になって。
「・・・・・・早く食べろ。」
見兼ねたガイアスがそう促すと、ぎこちなく食事を再開したのだった。

「セティ・・・あれはまずいわよ。」
城へ向かう馬車の中。イルアは溜息と共にセティエスを窘めた。いつもと逆だ。いや、たまにこういう事はあるのだが。
「やはり、何かおかしな事を言いましたか？」
これまた不思議そうに訊ねられ、イルアはこっそり思った。以前イルアに、発言に気をつけるように言ったのはセティエスなのに。
（親が親なら・・・とよく言うけれど、主が主なら従者も従者ってわけね・・・。）
自分たちの事なのに妙に納得してしまう。

「確かにレリィを見てると撫でたくなったりはするけれど・・・」
「ええ。あまりに愛らしいので、うさぎでも愛でている気分になりますね。」

がたん、と馬車が揺れたのは気のせいではない。耳の良いヴィトの事、聞こえた内容に思い当たる節があったのだろう。

「そうだけれど・・・セティがそういう事を言うと、レリィが恥ずかしくて死んじゃうわよ？」
言われてセティエスはとても驚いたようだ。
「恥ずかしくて・・・ですか？」
「そうよ。貴方に“愛らしい”だの“癒される”だの言われたら、並の女性は倒れるわよ。恥ずかし過ぎて・・・もしくは嬉し過ぎて。」
「嬉しいのならば良いではないですか。それに、私は駄目でお嬢様は良い。というように聞こえますが？」
反撃に出たセティエスに、イルアは優越感たっぷりに笑った。
「あら、私は同性だもの。照れる事はあっても倒れはしないわよ。」
「それならばガイアスやヴィトもそうでしょう？・・・まあ、ガイアスは言わないでしょうが。」
「言わないわね。」

（ガイアスがそんな事言ったら・・・レリィ、どうなるかな・・・）

一旦想像してみるものの、どう考えてもあの口から“可愛い”なんて言葉が出るわけがない。欠片も想像出来なくて諦めた。
「ともかくセティ。何か言ってレリィが赤くなっちゃったら止めるのよ？」
「かしこまりました。」
最後にはいつもの通りに素直に頷き、イルアとヴィトはほっとし

たのだった。

目の前には赤い毛並みのセツキ。隣にはガイアス。
レイリアはセツキの背をじっと見つめ、隣から感じる鋭い視線に焦っていた。

（ど、どうしよう・・・。全然言う事聞いてくれない・・・）

そう。昨日の復習という事で、セツキを伏せさせる事を要求されているのだ。昨日もほぼ一日やって、ようやく最後に伏せてくれたのだが・・・。
「リガル、伏せ！」
セツキの名前を呼ぶと耳が反応するものの、伏せという言葉には全く反応してくれない。どこ吹く風で退屈そうに尾を揺らしている。

（どうしよう・・・ガイアスの視線が怖い・・・）

顔を向けなくても分かる。苛立っている。
（ああでも、やらなくちゃ・・・！セツキに乗れたら、もっとお役に立てるかも知れないもの！）
気を引き締めてもう一度言う。

「リガル、伏せ！」

ぱたり、ぱたり、と規則正しく尾が揺れる。

（だ、駄目？やっぱり・・・）

そろり、と視線だけガイアスに向けようとした時だった。リガルがゆっくりと足踏みした。

（あっ・・・伏せてくれる・・・？）

と、目の前でゆっくりと足を折ったのだ。ガイアスが命じた時とは比較にならない程のっそりとした動きだったが、確かに伏せた。

「ガイアス・・・！」

感動しながらガイアスを見ると、不服そうな顔をしていた。

（うっ・・・だ、駄目かな・・・）

さっきから不安過ぎて両手を胸の前で組んでいた。それをぐっと握りしめる。

「・・・・・・乗れ。」

（！）

溜息混じりで言われた言葉は、間違いなく“一応でも”合格の意味だ。

「はいっ！」

元気良く返事をして、鞍を跨ごうとすると、途端にリガルがのっそりと立ち上がった。

「わっ」

リガルの背に足を押し退けられるようにされて、レイリアは仰け反った。それを予期していたガイアスは、焦る事もなく倒れないように支えた。抱きとめられて頬に朱が指す。

「あ、ありがとう・・・」

（もう慣れたな。）

ガイアスはレイリアをしっかり立たせて、もう一度、と促した。

レイリアは深呼吸して気持ちを落ち着かせる。

「リガル、伏せ！」

言われてもリガルは知らんふりだ。
（振り出しに戻ったな・・・）
小さく溜息を吐くガイアスだった。

しばらくして、完全に動かないリガルの様子に伏せさせるのは諦めて、騎乗の感覚に慣れてもらう事にした。
「リガル、伏せ。」
ガイアスが言うと、リガルはさっとその場に伏せる。それを見たレイリアは落ち込む。
（はあ・・・やっぱり違うなぁ・・・）
「おい、ぼんやりするな。」
「あっ、はい！」
俯いていたのをしっかり注意され、リガルの背に跨がるように促される。動かないのを確認しながらそっと乗ると、間を置かずにガイアスが後ろへ乗った。
（え？あ・・・そ、そうだよね・・・私一人じゃ乗れないから、これは当たり前なんだろうけど・・・）

距離が、近い。背中のすぐ近くに温もりがある。

（うぅ・・・）
手綱を取る為に両腕を回されれば、半分抱き込まれる様な形になるわけで。
（は、恥ずかしい・・・っ！なんにも集中出来ない・・・っ）
「お前も手綱を持て。」
「えっ！？はっ、はい！」
耳元で声がして、パニックになりかける。慌てて手綱を掴むものの、持ち方を直された。

「違う。適当に持つな。こうだ。これぐらいは開けろ。」
手を触れられればこれ以上ないくらいの緊張が走る。
（む、無理かも・・！どうしよう、頭真っ白だ・・・！）
「こ、こう・・・？」
声も手も震えている気がする。
「まだ立ってもないだろ。今からそんなに怯えてどうする。」
（そうじゃなくてっ・・・！）
ガイアスが気になって集中出来ない、なんて言えるわけがない。
「す、すみません・・・」
小さく謝ると僅かに溜息が聞こえた。撫でるように耳に息を感じて身震いする。
（うぅ・・・早く終わらないかな・・・）
習う側としては、逃げられない時間だ。
「立たせるぞ。足で背を挟め。堪えられないなら後ろにもたれろ。いいな？」
（後ろにもたれる・・・！？）
しかし、出来ないなどとは言えない。
「は、はい・・・」
泣きそうになりながらそう言って、ぎゅっと手綱を握りしめた。
「行くぞ。リガル、立て。」

「わっ」

リガルが立ち上がると、背が左右に揺れて安定が悪くなる。それでも立ち上がるまではなんとか堪えた。
「よし、いいな。・・・進め。」
ゆっくりとリガルが歩き出す。思ったより揺れが少なくほっとしたレイリアに、ガイアスは釘を刺した。
「これで安心するな。駆け回れるようになれよ。」

「えっ！？」

ぎょっとするレイリアに丁度良い機会だと思ったのか、ガイアスはリガルに命じた。

「走れ。」

「ええっ！？」

途端に走り出したリガルの動きに当然ついていけず、レイリアは踏ん張る事も出来ずに後ろにもたれざるを得なくなった。自分から頼る形になってしまって、かなり恥ずかしい。

「ご、ごめ」

「喋るな。舌噛むぞ。」

「っ・・・」

確かに走るリガルの上では、口を開くと危険だ。それにガイアスが後ろにいなければ振り落とされていたに違いない。

（ああ・・・こんな事で・・・ちゃんとリガルに乗れるようになるかな・・・）

この後しばらく、レイリアは疾走するリガルに乗るという体験を、思う存分したのだった。

第三話　懐かしい場所

暖かな風の吹いたある日。

朝食の席でイルアがふわりと笑んで言った。

「ねえ、レリィ。今日はヴィトとお出かけしてきたら？」

「はい！・・・・え？」

いつも通り勢いで頷いてから、レイリアは首を傾げた。両隣でガイアスとヴィトが苦笑している。このクセはもう止めても無駄だと悟ったようだ。

「あのね、今頃で申し訳ないのだけれど、以前のお店の方や、ご家族に会いたいのではないかしらと思って。どう？」

突然の提案に、レイリアは瞬いて言葉を反芻した。

「おばさんや父さん達に・・・」

「行ってくるといいよ、レリィ。こういう平穏な時間も、今度はまたいつになるか分からないからね。」

ふわりとセティエスに微笑まれ、未だに頬が赤くなってしまう。

「・・・は、はい・・・そうですね！」

ごまかす為にサラダをつついてみる。と、ヴィトがくすりと笑った。そっと耳元で囁く。

「セティエス様と行きたかった？」

「なっ、なっ！？そ、そんな、そんな事…」

慌て過ぎてろれつが回らないレイリアを見て、ヴィトは楽しそうに笑う。

「なあに？気になるわねぇ…」

イルアがじと、とヴィトを見ると、ヴィトは懸命に笑いを抑えて首を横に振った。

「いえ、大した事ではありません。」
「なんて言ってるけれど？」
ヴィトは諦めてレイリアに視線が移った。レイリアは赤くなっておどおどしている。それを、ガイアスが呆れながら見ていた。
「は、はい。なんとも・・・いえ、なんでも・・・」
しどろもどろしていると、セティエスがふわりと微笑んで言った。
「レリィとヴィトは特に仲が良いようだね。」
「「え！？」」
今度は二人して慌てた。それを見てイルアとセティエスが楽しそうに笑う。
「お二人共・・・からかわないで下さい。」
ヴィトが疲れたように訴えると、セティエスがふっと鋭い目を向けて笑った。
「おや？ヴィトはからかっていないのか？」
「・・・っ！」
見透かされて言葉に詰まる。そんなヴィトに満足そうに笑うセティエス。そんな朝の風景を見て、ガイアスは深いため息を吐いた。
「・・・前にも増してうるさいな・・・」

朝食が終わると、イルアは擁護院へ行く。セティエスは屋敷に残って何やら仕事をするようだ。ガイアスはいつも通り騎獣番の仕事を。ヴィトとレイリアは勧められた通りに出かける事にした。
いつものように騎獣番の服装で行こうかと思っていたら、イルアに断固反対された。
「駄目よ。絶対に駄目。お願いだから。」
イルアに懇願されたら着替えるしかない。懇願するイルアにちょ

っと頬を染めつつ、レイリアは素直に着替えに行った。

「イルア様…本当はレリィに侍女服着せたいんですよね？」

笑いながら言うと、イルアはにこりと微笑んだ。

「当たり前じゃない！ヴィトだって、レリィの女の子らしい服装、好きでしょう？」

「・・・え！？」

あまりに唐突に言われて焦った。目が泳ぐ。

「それは、まあ…それらしい恰好の方が、良いとは思いますが…」

「なあに？押し倒しちゃいそう？」

「イ、イルア様！」

慌てふためくヴィトを笑って、イルアはレイリアの部屋へ向かう。

「レリィ、入るわよ？」

「あっ、はい！」

入る時にちらりとヴィトを流し見ると、げんなりしつつ壁に手を当ててもたれていた。

（屋敷内で私がいない時は、騎獣番の服を着るように言っておかないと、ね。）

考えながら、イルアはくすりと笑った。同性で良かったと思う。純粋に可愛い姿を愛でられるのだから。

「ね、レリィ。髪を編んであげるわ。」

「ええっ！？そ、そんな！イルア様にそんな事をやって頂くわけには・・・！」

「いいから、ね？」

にこりと微笑まれると、断るのが悪い事のように思えてしまう。

「う・・・じゃあ・・・お、お願いします…」

「任せて！」

イルアはレイリアを鏡の前に座らせ、後ろへ回って髪を梳くとこ

ろから始めた。

馬車は使わず、街までは歩いてきた。レイリアは久しぶりに着たスカートに、なんだかそわそわしていた。
「そんなに気になるの？」
笑いながらヴィトに言われ、レイリアも笑い返した。
「うん・・・なんだか着慣れなくて…」
「・・・屋敷に来てからは、主に騎獣番の仕事と体力作りだったからね・・・」
ヴィトは苦笑いをして、それからすっと手を差し出した。
「？」
その手を見つめて首を傾げると、とても柔らかく微笑まれた。
「休日は人が多いから、レリィがはぐれないように。」
「あ・・・そ、そっか。ありがとう・・・」
確かに、足を進めるにつれて人が多くなってきている。自分ならはぐれて迷子になりかねない。
そう思っておそるおそる手を重ねると、しっかりと握られて心臓が跳ねた。思わず手を引っ込めそうになると、笑って逆に引かれた。
「イルア様にレリィの髪が編めるとは思わなかったね。」
「あ・・・うん、実は私もそう思った！」
くすくすと笑い合って、ふいにヴィトが言った。
「よく似合うよ。可愛い。」
「・・・・・・っ！？」
一気に頬が熱くなる。
「えっ、あの・・・・・・えっと・・・」

なんとか口を動かすレイリアに笑いかけて、ヴィトはごく自然に手を引いて歩いていく。
（うぅ・・・ヴィトにこんな事言われるなんて・・・）
恥ずかしくて手を引っ込めたい。が、ヴィトはしっかり握っていて、それを振りほどくなんて出来そうにない。
（なんでだろう？・・・前はこんなに意識するような事、なかったのになぁ・・・）
なんだか周りから見られているような気がして、レイリアは出来るだけ縮こまった。

ヴィトはちらりとレリィを振り返った。
ふわりとした服の裾が歩くたびに揺れる。普段は長袖を着ているが、今日は五分袖で、細いリボンで肘辺りを絞ってある。細い腕を強調するようだ。いつもは一括りにしてある髪は、イルアによって複雑に編まれていて、とても愛らしい。
（イルア様のにやけた顔が目に浮かぶなぁ・・・）
苦笑しながらも、今一緒にいるのが自分だけだと思うと嬉しくなる。
きょろきょろしていて行き交う人にぶつかりそうなレイリアを見て、ヴィトはくすりと笑った。
「レリィ、危ないよ。」
「あ、うん。」
笑ってレイリアが少し近づいてくる。それだけですごく嬉しい。
「レリィのご両親は下の街にいるんだよね。」
「うん、そう。お父さんは出かけてるかも知れないけど・・・」
「そうか・・・ごめんね。あまり家に帰せなくて・・・」
「ううん。側にいたいって言ったのは私だし、手紙でやりとりしてるから、大丈夫だよ。」
ふんわりと微笑んで、レイリアは無意識にヴィトの手を握り返した。

「でもおばさん達には会いたかったの。だから、やっぱり嬉しい。」
「・・・・・・・・・」
ヴィトは黙り込んで見つめた。表情が消えている気がする。
「どうしたの？」
首を傾げる姿を見て、ヴィトはぎこちなく笑顔をつくった。
「いや・・・なんでもないよ・・・」
「そう？」
じいっと様子を伺われて、ヴィトは焦った。
「あ、レリィが働いてたお店はあっちだっけ？」
「うん！案内するね！」
言いながらレイリアがヴィトの前に出た。そうして今度はレイリアが、ヴィトの手を引いて歩き出す。なんだか、大人を案内する子供みたいに張り切っていて、熱した気持ちが一気に落ち着いた。自然と心が温かくなる。
「急がなくていいから、ゆっくり行こう。」
「うん！」
レイリアが満面の笑みで答えた。

「おばさん！リィルさん！」
元気よくお店の扉を開けて入っていくと、昼休憩をとっていた二人が仰天して立ち上がった。
「「レリィ！」」
「お久しぶりです！」
走り寄った勢いで二人に抱きついた。そんなレイリアの後ろから、ヴィトもお店へ入る。
「え、え？ちょっとレリィ！」
ばしばしと背中を叩かれて、誰なの、と聞かれて笑った。
「お屋敷で従者の仕事を教えてくれている、ヴィトです。」

「初めまして。突然お邪魔して申し訳ありません。」
ヴィトが丁寧にお辞儀をすると、おばさんもリィルも慌てて頭を下げた。
「そんな、とんでもない！」
「邪魔だなんて！あ、今お茶を！」
リィルが言いながら厨房へすっとんで行った。
「お構いなく・・・」
すでに厨房へ消えたリィルへ、形だけでもそう声をかける。そして、唖然としてはいるが店主らしく表情だけは笑顔を浮かべているおばさんへ、挨拶した。
「レイリアをバルクス家へ送り出して頂いて感謝している、と主人が申しておりました。本当にありがとうございます。」
「い、いえいえ！とんでもない！」
おばさんは慌ててそう言った。それから側に立つレイリアを眺めて、成長した我が子を見るように、満足そうに微笑んだ。
「・・・この子が幸せそうで、ほっとしました。イルア様にもよろしくお伝えください。大事にして頂いているようで、私たちも感謝しています。」
「おばさん・・・」
レイリアの目尻に涙が浮かぶ。
「しかとお伝え致します。・・・レリィ、ゆっくりするといいよ。・・・レリィ？」
「レリィ・・・相変わらずだねぇ。」
ぽろぽろと泣いていた。驚いて戸惑うヴィトとは対照的に、おばさんはぽんぽん、とレイリアの頭を撫でた。
「ありがとう・・・おばさん、ヴィト・・・」
「やだレリィ、どうしたの？」
お盆にお茶を運んできたリィルが、これまた落ち着いてレイリアを観察した。

「あ、どうぞお茶を。」
レイリアをさておき笑顔でお茶を勧められ、ヴィトはかなり戸惑う。
「あ、ありがとうございます・・・」
「どうせ何か感動したんでしょう？」
ヴィトの戸惑いに気付いてリィルは笑った。
「そうなんですか・・・」
そういえばレイリアが泣く時は、大抵、嬉しい時だったなと思い返す。
「変な子で、嬉しい時にしか泣かないんですよ。まあ、涙もろいというか。」
リィルもまた、妹でも見るように柔らかい笑みでレイリアを見つめていた。
「実はバルクス家へ行くって時も、おばさんに励まされて大泣きしたんですよ。まるでお嫁に行くみたいで・・・」
「リ、リィルさん！」
話しを聞いていたらしく、まだ涙の残る目のまま、レイリアがリィルの腕にしがみついた。
「い、言わなくていいですから！」
「恥ずかしがらなくてもいいじゃないの～。」
リィルが嬉しそうにからかう。
「は、恥ずかしいです・・・！」
そんな様子にヴィトも思わず笑った。
「ヴィト・・・」
恥ずかしいのを笑われて途方に暮れるレイリアを見て、ますます笑ってしまう。
「で？今日はゆっくりしていけるの？」
「あ・・・いいえ。後でお母さんのところに寄る予定です。」
「そう、じゃあ・・・」
おばさんとリィルが目を合わせた。

「「面白い事になりそうね！」」

第三話　懐かしい場所（後書き）

第四話　ヴィトの油断

おばさんとリィルと別れ、レイリアとヴィトは再び二人で街を歩き始めた。時刻は昼を過ぎた頃で、昼食はおばさんにごちそうしてもらった。

「店主の手料理は美味しかったね。ちょっと驚いた。」

ヴィトにそう言われて、レイリアは自分の事ではないのに胸を張る。

「でしょう？温かい味なのよね。けどヴィトのご飯も美味しいよ！」

にっこりと言われて嬉しいのに、何故かちょっとだけ悲しい。

「あ、ありがとう・・・」

逆の立場だったら良かったのに。けれどレイリアの笑顔を見ると、やはり嬉しさが勝ってくる。

「レリィの母上はどんな方？すごく社交的だって聞いたけど。」

「うーん、そうね・・・。」

しばらく考えて、レイリアはゆっくりと口を開いた。

「・・・外に出るのが好きで・・・人と話すのが好きで・・・噂話が大好きで・・・知らない間に相手の弱みを握るのが得意な人。」

「・・・・・・・・・へえ・・・」

レイリアから聞くだけに、末恐ろしい人な気がしてきた。ちょっと緊張したヴィトに気付いて、レイリアはぎゅっと手を握って微笑んだ。

「大丈夫よ、ヴィト。根は優しい人だから。ね！」

するとヴィトの目線が泳いだ。何か不安になるような事を続けて言ってしまっただろうかと、レイリアが覗き込む。

「あの、ヴィト？」

覗き込まれて逃げ場がなくなったヴィトは、足が止まった。そうすると当然、レイリアの足も止まる。
「ヴィト？」
思わずレイリアの肩を掴んでそれ以上距離が縮まらないようにして、ヴィトは声を絞り出した。
「れ、レリィ・・・」
掴んでからしまったと思った。これじゃあ離れられない。
「どうしたの？」
相変わらず握られた手が熱を帯びて、レイリアの眼差しがすぐ近くにあって。
ついでに、じっと見つめられて。
「・・・・・・」
人通りが多いにも関わらず、そんな目気にしなくてもいいか、と自分が囁く。
「あの、ヴィト？具合でも悪くなった？目眩でもする？」
そんな理由があってもいいかもなぁ、なんて思って。掴んだ肩をちょっとだけ引き寄せた。
「レリィ・・・」

「レリィ！」

え？
そう思ったのはヴィトだけではないらしく、レイリアも驚いて声の主を探していた。
（・・・誰だ、呼んだの。）
ほっとしつつも若干機嫌が悪くなったのは仕方ないだろう。見渡す先に、どこか見た事のあるような男がいた。
（男？）
まさかと思って見つめる先で、男はどんどんこちらに近づいてくる。セティエスには及ばないが中々の美丈夫だろう。

「レリィ・・・？」
「あ、うん。あの人はね・・・」
（知り合い？）
誰だそんな知り合い。人目がなければ睨み殺してやるのに。なんて思っている間に、男は目の前まで来て、微笑んでレイリアの頭に手を置いた。
「久しぶりに見たら、随分綺麗になったなぁ。」
言われてレイリアは恥ずかしくて視線を逸らした。
「今日はイルア様が綺麗にしてくださったから・・・」
恥ずかしがるレイリアからするりと視線をヴィトへ向けて、その男は睨んできた。

特に、レイリアの肩に置かれた手と、つないだ手を。

「で、こちらは？レリィ。まさか誘いを受けてたわけじゃないだろう？」
ざわりとヴィトの攻撃性を逆撫でする。
「そんなわけないでしょ！兄さん、あんまり失礼な事言わないで！」
「・・・兄さん？」
聞こえた単語に目を見張った。
（どうりで見た事あるような気がすると思った・・・）
レイリアに似ていたのだ。
「じゃあこちらは、バルクス家の・・・」
すっかり我に返ったヴィトは、すぐにレイリアから手を離して、丁寧に頭を下げた。
「バルクス家侍従（じじゅう）のヴィトと申します。」
「失礼致しました。私はレイリアの兄で、シェルキスと申します。伝書館（でんしょかん）で働いております。」
（伝書館・・・ああ、文書のやり取りをするところか・・・）
イルア達は侍従を使って文書や物のやりとりをするので、使うの

は庶民ばかりだ。
「今日はどうして街へ？」
「イルア様が暇を下さって、今、おばさん達に挨拶に行ってきたところなの。それでこれから、家へ行くところ。」
話すレイリアはとても楽しそうで、兄だと分かっていても若干嫉妬してしまう。そんな自分に、苦笑した。
（なに嫉妬してるんだか・・・）

レイリアは、誰のものでもないのに。

レイリアの実家は街の隅っこにあった。大きな通りを離れ、喧噪から逃れたところにある。
途中出会ったシェルキスは昼休憩へ出ていたようで、挨拶が済むとすぐに帰っていった。どうやらレイリアを見つけて声をかけただけのようだ。
（良かった・・・気付かれてなくて。）
一人ほっとするヴィトをよそに、レイリアは嬉しそうに自分の家の扉を開けた。

「ただいま、お母さん！」
すごくわくわくした声が聞こえて、その表情がすごく見たい衝動に駆られる。だが、先程の事もあり、冷静に踏み止まった。
レイリアが家の奥へ駆けていく。ヴィトは追いかけるわけにも行かず、取りあえず家の扉を閉めて、その側へ佇んで待つ事にした。
ほどなくして家の奥からレイリアと、すっきりとした目鼻立ちの女性が現れた。いかにも洞察力がありそうで、少々きつい印象を受ける。
その女性？レイリアの母親は、ヴィトを見るなり目を見張った。

「レリィ！お屋敷でお婿さん掴まえたの！？」
「「えっ！？」」
息ぴったりに慌てて、二人して大急ぎで弁解した。
「ち、違うのお母さん！ヴィトは同僚だから！」
「そうですよ！レリィには・・・」
殿下がいる、そう言おうとして慌てて口を噤んだ。
「今日はヴィトの手が空いてたから一緒に来てくれたの！」
レイリアが捲し立ててくれたのでほっとしていたら、母親の目がきらりと光っていた。
（うわっ）
兄の時とは違い、背筋が凍る様な目だった。
「分かったわよ、レリィ！そんなに捲し立てなくても～」
「お母さんが勘違いするからでしょ！」

ヴィトの本能が、この母親は危険だと察知した。

レイリアの母親は、庶民にしておくのが勿体ないくらいに情報網が広く、それを有効に活用出来る人だった。
実際、若い頃には城からの誘いもあったらしいが、レイリアの父親と出会い、迷いなくその話しを蹴って、結婚したらしい。
「父さんは優しいけど鈍感な人でね。私が“城には行かないわ。あなたと結婚するから”って言うまで気付いてもいなかったのよ、私の気持ち！」
と、涙ぐんで笑いながら言っていた。
そして帰り際、ヴィトの肩を掴まえて囁いた言葉に、ヴィトの中でレイリアの母親は、超危険人物に加わった。
「レリィは人気があるみたいですね？私の情報網を甘く見ていると

痛い目に遭いますよ。そう、狙ってる方々にお伝え下さいな。」

「・・・・・・・・」

レイリアの実家を離れ、ヴィトはぐったりしていた。

(精神的に疲れた・・・これならイルア様にいびられてる方が楽だ・・・)

心無しか足取りが重い。

「ヴィト、大丈夫？ごめんね、話し始めると止まらないから・・・」

(そういう事じゃ、ないんだけどな)

しかし、レイリアを落ち込ませたまま帰ったら、イルアにどんな目で見られるか。

「大丈夫だよ、レリィ。優しい方だっていうのは、ちゃんと分かったから。」

(賢い方みたいだから、無駄に敵をつくるような真似はしないだろうな。)

心の声を抑えて言うと、レイリアの顔に笑顔が戻った。

「そう？良かった！」

(ああ・・・)

この笑顔が見られれば、それで。

(疲れてもいいや。)

そう、思えるのだ。

街外れから、イルアの屋敷がある奥までの間に、貴族達が利用す

る店の並びがある。そこまで戻ってきて、レイリアとヴィトは人ごみに揉まれていた。
「なんだか、もう夕方になるのにすごい人だね・・・」
しっかり手を繋いでいないと、すぐにはぐれて、流されてしまいそうだ。
「今日は夜市(よるいち)があるからじゃないかな。特殊な商品が並ぶから、それが目立てだと思う。」
「そう・・・なんだ・・・」
こうして歩くだけでも結構疲れる。ヴィトはレイリアの手を引いて、人ごみを逃れて細い路地へ入った。
「ふぅ・・・」
「すごいね。」
人ごみを背に、ヴィトはレイリアに笑いかけた。と、その時。
とん、と軽く押され、ついでにぽたり、と何かが落ちる音がした。
わずかに振り返ると、かなりの美貌を持った男が通り過ぎるところだった。
「ああ、すみません・・・」
すぐに人ごみに紛れてしまったものの、足下に落ちている財布が男のものだと気付いて、声をかけようとした。
「あ・・・!?」

一瞬だった。

財布を拾うためにレイリアの手を放した。

その、一瞬。

「レリィ!?」

レイリアとは違う気配がして振り返ると、いなかった。すぐに五感を研ぎ澄まして気配を追う。
（あっちか・・・！）
細い路地を曲がると、人目に触れないようにしながら、その優れた身体能力を使う。
影を走り、屋根を伝い、確実に後を追う。しかし、相手も同じ様な速さで逃げていく。
（どうして・・・）
いくら鍛えたとしても、ヴィトの―獣族の能力には及ばない筈だ。それなのに相手は、多分レイリアを抱えた状態であるのに、ヴィトと同じ様な速さで動いているのだ。
（こっちだ・・・！）
屋根を降りて角を曲がる。
「！？」

そこに、一人の男が倒れていた。

「バーレク！」
男は地面に倒れていて、その左足からは、ひどい量の血が流れていた。
「バーレクさん！どうしたんですか！」
さっと辺りを伺うものの、すでにレイリアを拉致した何者かは遠くへ去ってしまった。レイリアを追いたいものの、声をかけた手前、放っては置けない。
男は、イルアが受け持つ擁護院にいる、バーレクという男だった。あまり擁護院には行かないヴィトが、唯一見知っている男だった。
（レリィ・・・！早く知らせないと・・・！）
「バーレクさん！」
バーレクはぐったりしていた。意識がないのだろう。元々悪くしていた左足は、多分、使い物にならないくらいの怪我を負っている。

（バーレクさんのいる擁護院はここから遠い筈だ。この人が一人でここまで来られるわけがないし・・・）

考えを巡らせながらその傷を見て、ヴィトは、心臓が鷲掴みにされたような衝撃を受けた。

（・・・一体・・・どういう事だ・・・）

目眩がする。

それは、まるで自分が付けたかのような・・・獣に抉られたかのような、傷だった。

第五話　悪魔の蜜

「いない？」

イルアが首を傾げると、擁護院（ようごいん）の院長は不安気に顔を曇らせた。

「ええ。今朝からなんです。朝食を食べ終わるまではいたんですよ。それは、間違いありません。子供達も見ていますから。」

「・・・けれど、この敷地を出た形跡はないのでしょう？」

「ええ・・・一応、私たちが確認したところでは・・・。けれど所詮は素人ですので、警備所に頼もうかと思っているのです。」

（警備所か・・・あのバーレクが、誰にも見られずに姿を消せるとは考えにくいわね・・・）

「そうね・・・私から伝えておくわ。それと、三将軍にも相談してみます。」

「さ、三将軍様に・・・？」

院長の驚きように、イルアはふわりと微笑んだ。

「私の預かる擁護院の事ですもの。出来る限り早く、皆に安心してもらいたいの。」

「イルア様・・・！」

感動する院長に少し罪悪感を感じながらも、出来る限り優しく微笑む。

「しばらくはこちらに警備兵を置いて頂けるよう、進言してみます。」

途端に不安そうになった院長に、イルアは小さく頷いた。

「もちろん、子供達には分からないように配慮してもらうわ。」

「・・・ありがとうございます、イルア様・・・！」

（院長から警備所に連絡がいけば、騒ぎになり兼ねないものね・・・。）

イルアは帰りの馬車に揺られながら、考えを巡らせた。

（バーレクは元兵士だから、何かしら政治的な思惑で、突発的な理由で動く事も考えられるけど・・・でも、左足がほとんど動かないから、兵力は期待できないのよね。）

イルアの目に、以前会った時のバーレクの様子が思い浮かんだ。

（それにねぇ・・・。あの変態が私の訪問日が分かっていて、わざわざその日を選んで姿を消すとは考えにくいのよねぇ。あいつなら私に会ってからやるわね。十中八九。）

バーレクは軽薄でしつこい男だ。イルアを見れば足を引きずってまで飛んで来て、足が悪いのを理由にイルアに抱きついたりする変態だ。

セティエスやガイアス、ヴィトに睨まれようが蹴られようが、へらへら笑って懲りない様な男。

（そのバーレクが、姿を消す。ねぇ・・・）

嫌な予感がしてならない。イルアの目が鋭く細められた。

屋敷へ着いたのは夕暮れ時だった。ここからバーレクのいる擁護院までは遠く、早朝出かけて昼頃につき、少し様子を見て帰るまでには日が暮れる。

馬車を降りるとすぐにヴィトが扉を開けて出迎えてくれた。しか

し、その表情に緊急事態だと察して、すぐに居間へ入る。
「どうしたの？」
問いかけると、ヴィトではなく、セティエスが答えた。
「お嬢様。こちらへ。」
言われるままに客間へと足を運ぶ。
「レリィは？」
訊ねた言葉に、ヴィトの表情が凍り付いた。
「・・・ヴィト、レリィはどうしたの？」
思わず詰問するような口調になった。が、セティエスがそれを諌める。
「それもお話します。」
そう言って、客間の扉を開けた。

「！」

開けた途端に血の匂いが鼻についた。
「バーレク・・・」
その左足が真っ赤に染まり、手当の為に巻かれた布も、寝台さえも赤く染めあげていた。
「どういう事・・・？」
訊ねながらも寝台へ歩み寄り、巻かれた布を丁寧に解いていく。
「レリィが攫われました。」
「！」
ぱっとヴィトを見据える。と、セティエスが言葉を続ける。
「追おうとした際に彼を発見したようです。」
それで、理解した。おそらくヴィトが追えないように、この男を晒したのだろう。
「・・・あれを取って来て。」
言われてセティエスが部屋を出て行った。残されたヴィトは、イルアに事の詳細を報告する。

「俺でも追いつけませんでした。気配も一瞬しか感じられなかった。・・・そして、バーレクさんの足の傷ですが・・・」
ぱらり、と布を外して、イルアは驚愕した。
「・・・・・・これは・・・」
深く抉る様な、まさしく、爪痕。
「イルア様・・・」
「信じられないわね・・・」
呆然としているのに、我知れず苦笑する。
「貴方が気配を察知出来なくて、貴方が追いつけなくて、貴方と同じ様な“爪痕”を残す。・・・こんな事、本当にあるのね・・・」
言いながらヴィトを振り返った顔には、優しい眼差しがあった。

（イルア様・・・）

その目はヴィトを責めてもいなければ、ヴィトを疑ってもいない。同族の行いに嫌悪を示すものでもなく・・・ただ、優しかった。

こういう事実があるのを仕方ないと受け入れているのか、ただヴィトを安心させようと思っているのか、それは分からない。けれどヴィトには、その眼差しだけ十分だった。まだ、イルアに信頼してもらえているのだと確信した。

「お嬢様、お持ちしました。」
セティエスが言われた物を持って戻ってきた。手渡したそれは、イルアだけが扱う事を許された、“悪魔の蜜”だった。
イルアは己の人差し指の腹に、一緒に手渡されたナイフの切っ先を当てた。ぷつりと切れて、鮮やかな赤が溢れ出す。爪先をわずかに濡らし、鮮血が蜜へと滴り落ちた。少し振って混ぜ合わせると、今度はそれを自ら口へ含む。
そうしてそれを、バーレクの傷へと吐き出した。

「・・・何年もお嬢様と供におりますが・・・本当に不可思議なものですね・・・悪魔の蜜というのは・・・」
セティエスの呟きには、ヴィトも同感だった。

悪魔の蜜は、イルアの血を混ぜると猛毒となる。わずかにでもその香りを嗅げば途端に虜になり、口に含めば甘やかな蜜の味が、安らかな永遠の眠りへ誘う。例え甘い物が嫌いなエルフィアでも、もしもその香りを嗅いでしまえば抵抗もなく魅了されてしまう。それが、“悪魔の蜜”だった。
しかしそれに、さらにイルア？蜜を扱う事を許された者―レーヴェの体液を混ぜ合わせれば、瀕死の怪我や病気も瞬く間に治す。
それ故に大昔は、悪魔の蜜を巡って世界戦争が起こった程の代物だった。

今、蜜に触れたバーレクの怪我は、見る間に出血が止まり、身体の組織が再生しようとしていた。流れた血は瞬時には戻らないが、明朝には顔色も幾分か良くなっているだろう。
「・・・これで心配ないわね・・・」
ほっと息をつくイルアにセティエスが声をかける。
「しかしお嬢様。どのように説明なさるおつもりですか？」

バーレクならば、自分が負った傷がどの程度のものなのか理解出来る。今回の傷は、到底治るものではなかった。普通ならば、切断していただろう。

イルアは長く息を吐いて、苦笑いをした。
「・・・記憶が曖昧だって事にするしかないわね。文字通り“瀕死”だったわけだし。普通の手当てしてたら一時間後には死んでいたわよ。」
「ひどい出血でしたからね・・・」

イルアの言葉にヴィトは頷いた。
「・・・そうですね。」
バーレクには睡眠薬でも盛るしかない。目覚めが速過ぎると記憶をごまかせなくなる。
「では、バーレクの事は私が請け負います。」
「そうね・・・任せたわ、セティ。」
セティエスに笑いかけて、イルアは客間を後にした。

第六話　渦巻く不安

部屋を出たイルアの後をヴィトが追った。
様子がおかしいと思ったからだ。レイリアが攫われて、イルアが平静でいられる筈がないと思った。それなのに、今までが冷静過ぎる。
「イルア様・・・」
声をかけてもイルアは振り向かなかった。早足に自室へ向かい、階段を駆け上がる。
（イルア様？）
ヴィトが追いつく前に扉が閉まり、がさごそと衣服を漁る音が聞こえた。ついでにあれこれと物を物色しているようだ。五分程してから、部屋の扉が開いた。

「！・・・イルア様！その恰好は・・・」

「・・・・・・・・」
イルアは、ドレスをやめてズボンを履いていた。一度だけエルフィアに連れられて鹿狩りへ行った時のような、動き易さと丈夫さを重視した服装だった。いつもはおろすか編んでいる髪も、無造作に首の後ろで括られている。
「どうするおつもりですか・・・お一人で・・・？」
一歩踏み出したヴィトに、針のように細い剣を突き出した。ヴィトの胸元で剣先が震える。
「・・・行かせて・・・」

すぐにでも泣き出しそうな瞳だった。
「イルア様・・・」
震えていた。こんなにも弱い姿を見たのは初めてだった。言葉も出ず、身動きも取れないヴィトに剣先を向けながら、イルアは数歩ずれて階段へ近づき、一気に駆け下りていった。
階下でセティエスが声をかけたようだが、イルアはそのまま行ってしまったようだ。
「・・・イルア様・・・レリィ・・・」
イルアが不安で仕方ないのが分かった。しかしそれを露にするのは今までにない事だった。

（もしこのままレリィに何かあったら・・・）

そう思うと恐ろしい。バルクス家は・・・この四人は、どうなってしまうのだろう。
「ヴィト？」
はっとして階下を見ると、セティエスが覗き込んでいた。
「お嬢様は・・・」
「・・・レリィが心配で・・・」
「・・・お前も泣きそうな顔をしている。」
「・・・・・」
そう指摘されて初めて気がついた。
「そう・・・ですか？」
セティエスはゆっくりと階段を上ってくると、そっとヴィトの頭に手を乗せた。
「そうだよ、ヴィト。何が不安だ？何が怖い？」
目頭が熱くなった気がした。真っ直ぐにセティエスの顔を見ているのに、少しぼやけている。
「・・・レリィは無事なんでしょうか。イルア様は・・・大丈夫でしょうか。俺たちはどうなりますか。俺・・・」

セティエスが困ったように笑った。何故笑われているのか分からないまま、ヴィトは子供みたいに不安を言葉にした。

「・・・ここ以外に居場所なんてないんです。」

ここ以外で、人らしく生きられるところなんて、ヴィトにはないも同然だった。

「・・・ヴィト。」

「はい。」

「・・・お嬢さまが泣いていないのに、お前が泣いてどうするんだ。」

「あ・・・・・・」

指を当ててみると、言われた通り泣いていた。途端に笑えてしまった。恥ずかしさよりも情けなさが込み上げてくる。

「一先ず、私とヴィトはお嬢様の帰りを待つ。ガイアスは夜まで手がかりを探してもらおう。」

「イルア様を放っておくんですか？」

問いかけたヴィトに、セティエスは静かに微笑んだ。

「・・・お嬢様は大丈夫だ。レリィの命がかかっているのだから。ただ、動かずにはいられないだけだ。」

「・・・・・・」

セティエスの瞳は揺るがなかった。それで、ヴィトはようやく心を落ち着ける事が出来た。

「はい。セティエス様。」

レイリアはゆっくりと瞼を上げた。少し狭い部屋には小さな窓し

かないらしく、窓から入る仄かな陽の光が、今は夕暮れだと告げていた。
（あれ・・・？私、いつお屋敷に戻ったんだっけ・・・）
そう思いながらぼんやり部屋を見渡して、レイリアは瞬いた。
「あれ・・・？」
（私の部屋じゃない・・・）
そう思って気付いた。

気付いた途端、血の気が引いた。

（お屋敷じゃない・・・！）
ベッドの上で足を引き寄せ、小さくなる。視線の先に扉を見つけて、ぎくりとした。
（私・・・ヴィトといたのに・・・）
はっとして思い出した。突然何かが現れたのだ。そして、それから今までの事を覚えていない。
（一体どこ・・・？）
そろりとベッドから降りて窓の外を覗いた。
（街だ・・・）
なんの変哲もなさそうな街だった。夕暮れ時なので、皆仕事を終えて帰ろうとしているようだ。
（けど・・・どこの街だろ？）
レイリアの良く知る街とは様子が違った。街人の着ている物も少し違うし、建物の感じも違う。レイリアの生まれ育った街よりも、重厚な雰囲気で、使われている色も濃い。
（一体どこなんだろう・・・）
しばらく考えても分からず、レイリアはベッドに腰掛けて思案した。

どうして自分はここにいるのか。拉致されたとしか思えなかった

が、レイリアへの扱いは優しいと思われた。どこも怪我をしていないから、運ぶのもある程度丁寧だったのだろうし、今いる部屋も、ちゃんと人の手が入っている。

（一体、どうして？）

レイリア個人に対する行動でないのは明白だ。レイリアは人より優れたところはない。だから、ここまでして手を出そうという者はいないだろう。

（じゃあ・・・）

ぞくりとした。思わず両腕で自分を抱きしめる。

（イルア様・・・？）

今一番狙われる可能性があるのは、レーヴェであるイルアではないのか。イルアは言っていた。レーヴェに手を出すのは難しい。一番弱い者？レイリアが狙われるのだと。それじゃあここに大人しくいるわけにはいかない。

（どうしたら・・・？）

ここにはヴィトも、ガイアスも、セティエスも、一番頼りにしているリュミエルもいない。レイリア一人で力押しするのは不可能だ。

「・・・・・・・・・」

（でも、ここでじっとしてても仕方ない！）

ぐっと拳を握り込んで、レイリアは勢いよく立ち上がった。

部屋の扉をそっと開けて、慎重に外の様子を伺う。

レイリアのいる部屋は廊下の端にあるらしく、建物の中心を半円に囲んで部屋があった。じっと様子を伺っていると、少し離れたところにある隣の部屋の扉が音もなく開いた。

「！」

驚きすぎて身動きが取れなかった。扉は少し開くと、開けた人物は少しの無駄もなくこちらを見た。つまり、この部屋を見ようとして扉を開けたのだろう。
（ど、どうしよう・・・）
動揺して頭も回らないレイリアのところへ、目が合ったままずんずん近づいてくる。
（どうしよう、どうなるの！？）
恐怖したレイリアの目の前で、その人物はぴたりと足を止めた。

「・・・・・・」
「・・・・・・」

しばし見つめ合った。

目の前にいるのは少女だった。十二、三だと思われる。肩下までの緩く波打つ髪はとろけるような蜂蜜色で、長い前髪が右目を隠してしまっていた。ぱっちりと大きな瞳は少しつり目で、可愛いながらも少しきつい印象を受ける。
愛らしい姿にも関わらず、着ているものは丈の短い黒のドレスだった。その腕には、濃い灰色のドゥールが抱かれていた。
（ドゥール・・・ララとは違う種類なのかな・・・）
恐怖も忘れてそのドゥールを眺めてしまっていると、閉じられていた瞼が開いた。
（わあ・・・すごく濃い色・・・）
光りの加減で僅かに緑だと分かる程、色の濃い瞳だった。そして、大きな瞳だ。不機嫌そうに細められる様まで可愛いと思えてしまう。と、少し上の方から愛らしい声が降ってきた。

「具合、どう？」

（え？）
一瞬どこから声がしたのか考えて、状況を思い出して戦慄した。
（わ、私・・・！）
慌てて顔を上げると、少女が小首を傾げていた。こんなに可愛らしいのに、先程からずっと無表情だ。
「あっ、あの・・・」
何か言わなくちゃと思うのだが、頭と口がうまく回らない。
「具合、悪い？」
もう一度少女が訊ねた。その台詞に全く害意も悪意も感じられず、少し考えた後、わずかに微笑んで答えた。
「大丈夫よ、ありがとう。」
「なら、いい。」
少女は小さく頷いて、短く用件を言った。
「セーヴィが話をしておきたいって。来れる？」
「え・・・と・・・」
セーヴィとは誰だろうか。イルアを狙う悪人だろうか。
「・・・・・・」
レイリアが考えている間、少女は無言で待っていた。苛々したり急かしたりしないのには、ちょっと感心する。
「あの、誰の事？私をここへ連れて来たのはその人？」
出来るだけ情報を集めようと、懸命に考えて質問する。が、少女は必要最低限しか喋らなかった。
「セーヴィはセーヴィ。貴女を連れて来たのはロシル。」
「う・・・そ、そう・・・」
レイリアの質問の意図を分かって躱されているのだろうか。それとも純粋に答えてくれているのだろうか。判断が出来なかった。
「来れる？」
「う・・・」
行っていいものかどうか。しかし、先程は体調を聞いてくれたし、今も無理に連れて行こうとも話をさせようという気配もない。取り

あえず危険はないのじゃないかと思った。
（えっと・・・余計は事は喋らない。イルア様の秘密なんて知らない。）
心の中で最低限の準備をして、少女の目を見据えて頷いた。
「行くわ。」
こくり、と少女は頷いて踵を返した。慌ててレイリアは後を追う。前を行く少女の腕の隙間から、抱かれたドゥールの黒っぽくて太い尾が揺れた。

「あの・・・あなたは誰？」
「わたしはわたし。」
「ああえっと、名前は？」
「リリィと言うの。」
（可愛い・・・！）
しかしリリィは振り向きもしない。この態度はどこで身に付いたのだろう。
「そうなの。ねぇリリィ。そのドゥールはなんて言うの？」
「この子はランセル。」
「ランセルは男の子？」
「ランセルは雄。」
「なんて種類のドゥールなの？」
「分からない。セーヴィなら知っていると思う。」
どこまでも淡々としている。そうして話している間に半円の通路を歩ききり、レイリアがいた部屋の真逆へ辿り着いた。
はっと身構えたレイリアには見向きもせず、リリィは部屋の中へと声をかけた。
「セーヴィ、いる？ロシルが連れて来た人を連れて来た。」

その言い方に、緊張が少し解けてしまった。
（連れて来た人を連れて来たって・・・）
その物言いが、幼さを感じさせてほっとした。リリィはどうにも子供らしさが欠けているように感じていたのだ。
「いるよ。今開ける。」
聞こえてきた声は、若い男のものだった。どくりと心臓が跳ねる。当たり前だがレイリアがここにいるのはリリィの仕業ではないのだ。
それを、今更ながら認識した。

第七話　攫われた理由

「ありがとう、リリィ。」

扉を開けて現れた青年は、セティエスとはまた違う美貌の持ち主だった。美丈夫、という言葉がぴったりだと思う。その美丈夫によしよしと頭を撫でられ、リリィは相変わらず無表情だったものの、どことなく嬉しそうな気がした。

「彼女と二人で話をしたいんだけど、いいかな？」

（えっ！？）

慌てるレイリアを余所に、リリィは即答した。

「うん。」

（リリィ！）

思わずリリィの腕を掴みそうになったが、リリィも味方ではないのだと思い直して留まった。そんな事をしている間にさっさとリリィはその場を去る。数歩離れていったところで、逆に青年に手首を取られた。一瞬びくりとしたが、思いがけず優しい力で、振り払えない。

「さあ、中へどうぞ。」

「・・・・・・」

そう促されると、思わず身体が前へ動いた。

（あ）

しまったと思った時にはもう、背後で部屋の扉が閉ざされた。

（お、落ち着け・・・！イルア様や皆の為に、ここは頑張るんだ！）
がちがちに固まるレイリアをあまり意識せず、青年は椅子を一つ持ってきてレイリアに勧めた。
「どうぞ座って。今お茶も用意するよ。」
「いっ、いえ！結構ですよ！」
てきぱきとお茶の用意をする青年に、思わず声をかけてしまった。青年がきょとんと目を合わすので、恥ずかしくなってくる。
「あっ、あの…」
何か言わなくちゃと言葉を探すが、彼は敵である可能性が高いのだから、こちらが気を使う必要はないのだと思い当たった。なので。
「わ、私に何かご用ですか！？」
イルア様に御用ですかとは言えず、飛び出た言葉がそれだった。
「「・・・・・・・・・」」
（わ、私に用があるから部屋に入れられたんだった・・・！）
穴があったら入りたい。相手が敵であろうが恥ずかしい。恥ずかしいが、素直にそれを出せる状況ではない。顔が赤いだろうなと思いつつも顔を俯かせる事しか出来ないレイリアの耳に、ふっと笑い声が聞こえた。
（うっ・・・）
敵に馬鹿にされるなんて。
「・・・そう怖がらないでくれるかな。状況が分からないだろうから説明しようと思ったんだけど・・・」
「え？」
思わず顔を上げると、優しく微笑む姿があった。テーブルの上に

は温かそうに湯気をくゆらす花茶が用意されていた。
「とりあえず座って。お茶でも飲みながら話そう。」
「・・・・・・」
じっと様子を伺うレイリアを見て、青年はしばらく悩んだ後、思いついて口を開いた。
「そうだ。まだ名乗っていなかったね。」
どきりと心臓が跳ねた。ぐっと唇を引き結ぶ。
「僕はセーヴィアス。大体セーヴィって呼ばれているよ。」
言いながらセーヴィアスは椅子を引き、座るようにレイリアを促した。それ以上逆らえずに、レイリアは恐る恐る腰掛ける。その右斜め前にセーヴィアスは腰をおろした。
「君はレイリアだね。バルクス家の侍女、でいいのかな？」

「！」
（やっぱり・・・イルア様の事、知って・・・？）

緊張でお茶を飲むどころではなく、セーヴィアスの目を見返すので精一杯だ。しかしセーヴィアスは一切身構える事なく話しかける。
「君をここへ連れて来てくれたのは、ロシルという男だよ。今は出かけているけど、夜には戻ってくるだろう。そうしたら会わせるよ。」
（人が増えたら・・・逃げにくくなっちゃう・・・）
そもそもこの男からも逃げられるか分からないが。
「ここは国境の町だよ。」
「・・・え？」
聞こえた言葉に耳を疑った。
「そして、隣国側。」
「・・・・・・」
「つまり、君がバルクス家へ戻るには国境を越えないと無理だ。」

（・・・隣国・・・）
「まあ近々国境を越えるから、そんな世界の終わりのような顔をしなくても大丈夫だよ。」
「えっ・・・そうなんですか？」
思わず言葉が滑り出た。するとセーヴィアスは肩肘をついてにこりと微笑んだ。
「そう。ちょっと早めに連れて来てもらったんだ。」
「・・・っ」
ぞくりと背筋が震えた。
「・・・どうして私を連れてきたんですか・・・？」
膝の上で握りしめていた手が震えた。

「イルア＝バルクスにレーヴェとして会ってもらうには、これが一番確実だからね。」
「！」

セーヴィアスの笑みは、とても柔らかだった。悪意や害意が少しも感じられない。それが、かえって不安を煽った。
「イルア様にどんな御用ですか・・・」
声が震えていた。それにセーヴィアスは目線を和らげた。
「・・・それはイルア＝バルクスに話すよ。」
「イルア様を放っておいて下さい。」
自分でもびっくりするくらいしっかりした声だった。
（この人はイルア様がレーヴェだって分かってて話してるんじゃないかも知れないし・・・下手な事言っちゃだめ。慎重に言葉を選ばなきゃ・・・）
ごくりと唾を飲み込んでセーヴィアスを見つめた。と、困りきった様子で溜息を吐いた。
「そうか・・・。大好きなんだね。」

「・・・・・・」
苦笑して、セーヴィアスは一口、お茶を飲んだ。
「調べによると、君は本当にただの女性のようだから、あまり込み入った事情は話さない方が良いと思ったんだけどね・・・」
「・・・・・・事情、ですか・・・？」
この人は一体、イルアに会ってどうすると言うのだろう。
「その様子だと君は、ちゃんとレーヴェが誰なのか知っているようだね。」

「っ！・・・」

（じゃあこの人は・・・イルア様がレーヴェだって、本当に知ってるの！？）
「僕はね、レイリア。イルア＝バルクスが苦しんでいるんじゃないかと思って、少し話をしようかと思ったんだよ。」
「イルア様が・・・苦しむ？」
どきりとした。ザクラス将軍を葬った後、エルフィアに会ったイルアは、ひどく傷付いた顔をしていた。

「実を言うと、僕も以前は同じ様な事をしていたから。」

「・・・・・・え？」
そう言ったセーヴィアスは、どこか悲しそうな顔だった。
「・・・いつも顔を見合わせる相手の、大切な人の命を奪うような事をしなくちゃいけない。」
（この人も・・・？）
「けど、その道を選んだのは僕自身だから。・・・苦しくてね。」
（イルア様・・・）
セーヴィアスから悪意も害意も感じられなかったのは、こういう事だったのか。思わず目頭が熱くなった。

「・・・・・・困ったな・・・」
ぽろりと涙が零れてしまって、レイリアは慌ててごしごしと拭った。
「すぐにでも帰してあげたいけどね・・・」
「・・・・・・」
ぐっと手を握りしめた。この人がイルアの苦しみを思ってくれているのは分かった。けれど、味方という訳ではないのだ。とにかく、余計な事はしゃべらないようにと、レイリアは決意を新たにした。

セーヴィアスは特に部屋にレイリアを引き止めたりせず、怯えるレイリアを気遣って部屋から出してくれた。さっきレイリアがいた部屋は自由に使っていい。分からない事があればリリィでもセーヴィアスでも聞くといいと言ってくれた。

（イルア様・・・どうしたらいいんでしょう・・・？）
鬱々（うううつ）としたまま部屋のベッドに寝転がっていると、こんこん、と小さなノックが聞こえた。
「あっ、は、はい！」
慌てて起き上がると、リリィが少しだけ扉を開けて顔を出した。
「ご飯、食べる？」
「え？あっ、えっと・・・」
確かにお腹は空いているが、ここでほいほいついていくべきなのか迷う。
「食べる？」
再びリリィに聞かれて、レイリアは良心に負けて頷いた。
「た、食べる・・・」
多分、リリィを寄越しているのはセーヴィアスなのだと思う。ど

う考えてもリリィはレイリア・・・いや多分、セーヴィアスにしか関心がない。だから正直、この親切を受け入れるのには抵抗がある。が、リリィにその気がないので、拒むのは可哀想に思えてしまうのだ。

結局リリィに連れられる形で、レイリアは食卓へと招かれた。

半円に並んだ部屋の中央に、一つの大きな部屋があり、そこが食卓だった。セーヴィアスはもう席についており、テーブルの上には美味しそうな食事が並んでいた。

「さあ座って。もうすぐロシルも帰ってくるだろう。」

セーヴィアスはにこやかにレイリアの椅子を引いた。ごく自然にそうされるので、レイリアも自然に座ってしまった。

「リリィ、ランセルは椅子に乗せなさい。テーブルは駄目だよ。」

「・・・はい。」

（やっぱり可愛いなぁ・・・）

ついつい口元が綻んでしまう。するとセーヴィアスが気付いて微笑みかけてきた。

「ランセルが気に入った？」

「えっ、あっ、いえ・・・」

思いっきり動揺してしまった。くすりと笑われて恥ずかしくなる。

「レイリアはドゥールが好きなのかな？」

「い、いえ・・・」

まともに目も合わせられない。

「そう？それじゃあ食べようか。」

「いただきます。」

リリィが意外にもきちんとそう言って、静かに食べ始めた。

（すごい・・・育ちが良いのかな・・・）

視線を移すとセーヴィアスも、セティエスと変わらないくらい上

品だった。
（・・・そんな人が、一体どうしてこんな事・・・）
スープをとる為にスプーンを持つ。
と、居間の扉が突如開いた。
「ああ、お帰り、ロシル。」

第八話　雲間の月

（この人が・・・）

扉は、玄関の扉だった。ここからすぐ外に出られるのかと、こっそり記憶に刻む。

ロシルは、一言で言えば鷹の様な雰囲気を纏っていた。短い髪や目の色が焦げ茶だったし、羽織っていた黒い外套や、鋭い目つきがそう思わせたのかも知れない。

「・・・・・・」

ロシルは入ってくるなりレイリアに目を留め、じっと眺めてくる。

（な、何・・・？）

戸惑っている間にすたすたと歩み寄り、横から、後ろから、また横から眺められる。

（な・・・何・・・？）

困りきってロシルを見ていると、すっと顔を首元に寄せられた。

（ななな何！？）

「・・・やっぱり、良い匂いがする。」

「え！？」

驚くレイリアを無視して今度はリリィの耳元に顔を寄せた。リリィは完全に無視だ。

「・・・・・・」

何も言わずにまたレイリアのところへ戻ってきた。身を強ばらせるレイリアを眺め、不思議そうに首を傾げてレイリアの隣に腰をおろした。

（ええっ！？何！？）
思わず助けを求めてセーヴィアスに視線を移すと、笑っていた。
「あ、あの・・・」
笑ってないで助けて欲しい。
「ロシル。まずは外套を脱いでかけなさい。それから、妙齢の女性にそう近づくものじゃないよ。」
「・・・そうか。」
分かったような分かっていない様な。ロシルは頷いて、言われた通りに外套を脱いでハンガーにかけた。そして改めてレイリアの隣に座り、もくもくと食べ始めた。
その様子を唖然と見ていたレイリアに、セーヴィアスは苦笑して言った。
「不躾ですまないね。彼は獣族で、人と関わりを持つ事にあまり興味がないんだ。だから、いくら教えても紳士には程遠い。」

「獣族・・・！？」

驚いて言葉が零れた。それに、セーヴィアスは特に反応せずに答える。
「そう。バルクス家にも獣族がいるんだってね？ロシルが言っていたよ。」
あまりの事に、何も言えずにロシルを見つめてしまった。気付いたロシルが目を合わせる。無言で見つめてくる様子が、寝起きのガイアスを思わせた。
（そう言えば・・・私を連れて来たのはロシルだって、リリィが言ってた・・・。じゃあ、あの時現れたのはロシルだったんだ。）
「・・・貴方は、どうして彼を・・・？」
問いかけると、セーヴィアスは少し悲しそうに笑った。
「・・・三年前に獣族殲滅（せんめつ）の命があったのは知っているよね。」
「はい・・・」

「彼は死にかけてた。命からがら逃げたんだろう。僕は幸運にも彼と出会って、彼は一命を取り留めた。以来、一緒にいるんだよ。」
「・・・・・・」
（じゃあこの人は・・・ヴィトの仲間なんだ・・・）
生き残りはヴィトだけだと聞いていた。けれど、ここにもう一人いたのだ。感慨深くロシルを見ていると、また視線に気付いたロシルと目が合った。ロシルは少し視線を泳がせた後、おもむろにフォークに差した肉をレイリアの口に突っ込んだ。
「むっ！？」
慌てて顔を引いたものの、肉はフォークを滑り落ちて口に残った。そのままロシルは見つめてくる。
（も、もしかして・・・欲しがってると思われた・・・？）
一向に咀嚼（そしゃく）しないレイリアを見て、ロシルは首を傾げた。
「食べないのか。」
「・・・・・・」
（は、恥ずかしい・・・！）
この歳になって人から食べさせてもらうだなんて、恥ずかし過ぎる。
「要らないなら・・・」
言いながら動きかけたロシルを、セーヴィアスが制した。
「待ったロシル。レイリアは食べるから、その必要はないよ。」
（えっ、何・・・？）
「そうなのか？」
再びじっと見られる。よく分からずに動けないでいるレイリアに、セーヴィアスは真剣な顔で言った。

「レイリア。食べないと“口で”取られるよ。」

（口で・・・・・・？・・・・どうやっ・・・・あ！）

理解した途端、かあぁっと体中が熱くなった。

（なっ・・・・！？な、なんでそうなるの！？）

慌ててもぐもぐと咀嚼する。ごくんと呑み込むまで見届けて、ロシルは自分の食事を再開した。

（怖過ぎる・・・！）

赤くなった次は青くなったレイリアを見て、セーヴィアスはくすくす笑っていた。

夕食を食べ終わり、レイリアは食器を片付けるセーヴィアスを見て手伝いそうになったが、抑えて部屋へ引っ込ませてもらった。

身なりを整えて、部屋の扉がしっかり閉まっているのを確認した。

（よしっ！）

気合いを入れてそっと窓を開く。窓のすぐ外はもう、街の通りだ。

（絶対に心配してる・・・・。それに、今はあんまり怖い事はされてないけど、これから先されないとも限らないもの。）

イルアは不安になっているだろう。自分に何かあれば、己を責めるに違いない。

（イルア様のために、出来る事はやってみなくちゃ。）

もう一度扉の方を確認して、そっと足を窓枠の外へ滑らせた。音を立てないように細心の注意を払って外へ降り立つ。忘れずに窓をそうっと閉めて、通りを振り返った。

（・・・よしっ！）

一歩、踏み出した。

その時だった。

（？？っ！？）

ひゅっと音がしたかと思うと銀色の線が目の前を走った。何事かと身を強ばらせる間に、糸のようなものが身体に巻き付き、締め上げられる。

（な、なに・・・？）

それは首にも巻き付いて、もう少し強く締められたら、確実に呼吸が出来なくなりそうだ。

ぞっと、身体が震えた。

「戻って。」

（！？）

聞き覚えのある、愛らしい声。いつの間にか目の前に、リリィの姿があった。

「まだ帰せない。戻って。」

「リリィ・・・」

この糸はリリィの仕業なのだろうか。　動けずにいると、リリィの背後で大きな闇が身じろぎした。

（なに・・・？）

目が逸らせないレイリアに見せつけるように、闇は瞼を開いた。

（！・・・まさか、ランセル・・・？）

巨大な闇は深緑あの瞳でレイリアを見つめている。その瞳には黄

金の三日月が映って、その生物の凶悪さをちらつかせていた。
「レイリア、戻って。」
もう一度言われ、レイリアは逃走を諦めた。リリィに、ランセル。どうあがいても、抵抗すら難しい。
（・・・どうすればいいの・・・？）
少しは鍛えてもらっていたとはいえ、レイリアはやはり、無力だと痛感させられたのだった。

恐怖と不安に震える夜が明け、朝を迎えて、レイリアはベッドの上でぼんやりと窓の外を眺めた。
（・・・イルア様・・・）
くよくよしていても仕方がないのは分かっているが、何も出来ない自分がもどかしい。しばらくそのままでいると、こんこん、と軽いノックの音がした。思わずびくりと身体が跳ねた。
（リリィ・・・？）
だとしたら、今は会いたくなかった。
「レイリア、起きてる？」
（やっぱりリリィだ・・・）
途端に昨夜の事を思い出して、そっと喉へ指を滑らせた。糸が巻き付いたそこは、触れるとぴりっと痛みが走る。
（怖い・・・）
リリィも、ランセルも。リリィに指示をしたであろうセーヴィアスも。
（開けたくない・・・）
「起きていたら、食事を。」
レイリアは身じろぎ一つせずにじっと待った。扉に近寄るのも怖

いし、扉を開けてしまうのも怖かった。
（何も出来ないんだもの・・・）
怖い。
しばらく経つと、小さな足音が遠ざかって行った。
知らず強ばっていた身体から急に力が抜けた。ほっと、わずかに息を吐く。そのまま、もそりとベッドに潜り込んだ。
（どうしよう・・・逃げられないとしても、あの人達と話す気なんて起きないよ・・・）
リュミエルが恋しい。いつでもレイリアを温かく見つめてくれるあの目が、恋しい。あの温もりが。
（リュミー・・・ごめんね、側にいられなくて・・・）
寂しくて不安な気持ちのまま、レイリアは無理矢理に目を閉じた。

「セティエス様、夕食の仕度が整いましたよ。」
「ああ、ありがとう。」
セティエスはぼんやりと座っていた長椅子から立ち上がった。レイリアの居所を調べるのには、まず自分が動けばいいのだが・・・イルアが落ち着かない今、屋敷をヴィト一人にするわけにはいかな

かった。
　ガイアスに調べてもらっていたのだが、夜遅くなってもイルアが戻らない為、今はイルアを探してもらっている。
「ヴィトも食べるといい。我々が力不足になっては、いざという時に役に立たなくなってしまうだろう？」
「・・・・・・・・・はい。そうですね・・・」
　幾分しっかりしたものの、力無く笑って、ヴィトも食卓へついた。
「遅いですね・・・」
　ヴィトの目が不安気に揺れた。それを見て、思わず溜息が出る。
「・・・そうだな・・・」
　窓から空を見上げると、雲が月を隠そうとしていた。

　ガイアスはもう、二時間程走り回っていた。いや、その前は情報収集のために走り回っていたから、かれこれ五時間近くなる。これだけ動き詰めになったのは軍にいた時以来だ。無茶な訓練の様で、懐かしくも感じた。
（まったく、あいつは・・・）
　月明かりが弱々しく照らす。それが今のイルアのようで、ガイアスは仕方なくその姿を探す。家出した猫を探しているような心境だ。
　心当たりをしらみつぶしに回って、ここが最後というところだった。
（いた・・・）
　木の陰に、座り込んだイルアの姿があった。

　がさっ、と草を踏み分ける音がして、イルアは顔を上げた。ガイアスが近づいているのは分かっていた。間違える筈もない、慣れ親しんだ気配だ。

「・・・・・・ガイアス・・・」
それしか言えず、イルアは黙り込んでしまった。と、呆れた声が降ってきた。
「何やってんだお前は。」
「・・・・・・」
相変わらずかちんとくる男だ。イルアは思わず苦笑した。
「・・・だって、レリィが攫われたのよ。大人しくいられる筈ないじゃないの。」
座り込んだまま、地面を見つめてそういうイルアに、ガイアスはさらに言葉を落とした。
「なら、何にもならない事はやめろ。」
「何にもならないって何よ！その通りだけど！」
「分かってるならさっさと戻るぞ。」

そう言って面倒くさそうに手を差し出された。その手を見つめて、イルアは力が抜けてしまった。
「・・・あんたってほんとに可愛くないわね・・・」
「気色悪い。」
「・・・・・・」
遠慮無く手を引っ張って立ち上がった。ついでとばかりに外套をばさりとかけられる。
「主人に対して横暴よ。もっと丁寧に扱いなさい。」
「はいはい。」
ひょい、と抱き上げられる。
「・・・寝るわ。」
「・・・・・・」
なんて自己中心的な主人だろうか。
（あいつがいなくなっただけで、こんなに取り乱すのか。）
イルアはもう瞼を閉じてしまっていた。それを少し見つめ、そっ

と歩き出す。

（リュミエルも気が立ってるしな・・・）

空を見上げると、月が頑張って雲間から顔を出していた。

第九話　彷徨う心

（イルア様、どうしてるかな・・・）

ベッドの上でうつ伏せに寝ながら、レイリアはバルクス家の皆の事を思い返していた。

（ヴィト、心配してるよね・・・）

ふわりと風が髪を弄んだ。

（セティエス様がきっとイルア様を見守って下さってる筈だよね。）

もそりと寝返りを打って横向きになり、溜息を吐く。

（ガイアスがリュミエルの事見てくれてる筈だし・・・）

さらりと顔にかかっていた髪がどかされた。

（後は私が・・・・・・・・？）

ぱち、と目を開く。どうもさっきから不自然に髪が躍る。そして、目を開いたまま、レイリアはあまりの事態に呼吸を忘れた。

（え・・・・・・・・・・・・え・・・？）

にこり、と目の前の少年が笑う。邪気のない、明るい笑顔だ。

が。

（・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ぇえっ！？）

距離があまりにも近かった。手を伸ばせばなんて距離ではない。むしろ手はすでにレイリアの髪を弄んでいるし、セミダブルのベッドの上に二人。かなり、近い。

驚き過ぎて頭が真っ白になったレイリアを眺めて、少年は穏やか

に微笑んだ。
「レイリア？」
びくっ、と身体が跳ねた。見知らぬ少年？もう僅かに少年の域を脱しているようにも思うが―に教えてもいない名前を呼ばれて、平静でいられるものか。レイリアはなんとか口を動かそうとして、上手く出来ずにただ、瞬いた。
すると少年はにっこり笑った。
「だよね。セーヴィから聞いてたから、間違いないよね。」
（・・・！じゃあ、この人もセーヴィアスの仲・・・っ！？）
レイリアの思考はいきなり少年が抱きついてきた事で中断された。思いっきり抱きついてレイリアを下敷きにする。

「なっ・・・なっ！？」
「んーっ可愛い！柔らかい！気持ち良い！」
（だ、誰かーっ！）

声が出ない。いくら頑張っても声が出てくれないので、必死に暴れて身を捩ろうとするが、がっちり抱き込まれてびくともしない。少年は嬉しそうにレイリアの首筋に頬を擦り付けてくる。
（なになに！？どういう事！？イルア様セティエス様ガイアスヴィト！助けてーっ！）
半泣きのレイリアなどまったく目に入らない様子で、少年はますますレイリアを抱きしめる。
（あ、危ない・・・！ロシルより怖いこの人・・・！）
本気で危険を感じていると、突然少年は顔を離した。
（あ・・・気が済んだ・・・？）
ちょっとだけほっとしつつも少年の様子を見ると、ばっちり目が合った。
（うっ、近い・・・）
吐息がかかる程。そして、少年がとろりと微笑んだ。

（まずい！絶対にまずい気がする！）

思わずぞくりと身を震わせた時？？。

ドカッ！と派手な音がして扉が開いた。

ひどい音がしたからどこか壊れたのかも知れないが、そんな事を確認する間もなく何かが少年に激突した。

「ちっ！」

「っ！？」

ベッドを挟んで少年と対峙したのは、ロシルだった。

（た、助かった・・・？）

が、二人は臨戦態勢だ。

「おいロシル・・・俺の邪魔するとどうなるか分かってるよな？」

少年は、さっきまでの無邪気さはどこへいったのか、別人かと思う程冷たく、狂気を孕んだ目をロシルへ向けていた。対するロシルも、これまた退く気の全くない様子で闘気をむき出しにしていた。

「良い度胸だなテメェ！」

少年は叫んでロシルへ飛びかかっていった。

（こ、ここで喧嘩！？）

当然の如くベッドの上を飛び越えていくものだから、レイリアは慌ててベッドの上の方へ移動して小さくなった。

さっきとは違う意味で、危険だ。

少年もロシルも殴るわ蹴るわで、あっという間に乱闘になってしまい、レイリアは縮こまっているしかなかった。

しかし。

（終わらない・・・）

二人とも結構本気でやりあっているのだと思うのだが、一向に収まる気配がない。

（どうしたらいいの！？）
途方にくれたレイリアの耳に、救世主の声が聞こえた。
「ロシル、ラヴィアス、止めろ！」
その声に、二人はぐっとお互いの胸ぐらを掴んで睨み合ったまま、取りあえず止まった。
（よ、良かった・・・！）
扉の方を見ると、怖い筈のセーヴィアスが輝いて見えた。
（今だけは、今だけは救世主に見える！）
そんなレイリアと目を合わせ、セーヴィアスは優しく微笑んだ。が、すぐに少年へと視線を戻すと表情を改めた。
「ラヴィ、帰って来たらどうすると教えた？」
「うっ・・・ただいま。」
「ちゃんとこちらを向きなさい。」
「・・・・・・」
ラヴィと呼ばれた少年はしぶしぶロシルから手を離し、きちんとセーヴィアスへ向き直った。
「・・・ただいま。」
するとセーヴィアスは、険しい顔から一変して、柔らかな笑みを浮かべて頷いた。
「おかえり。今リリィが一人で店番をしているから、行ってあげてくれ。」
「・・・・・分かったよ。」
名残惜しそうにレイリアを見て、少年は部屋を出て行った。
（い、行った・・・）
ほっと肩の力を抜いたレイリアを見て、ロシルが猛然と近づいてきた。
「なっ、なに・・・？」
じろりと全身を眺め見て、何故かセーヴィアスを見た。

「大丈夫だよ。ロシルはいつも通り警護に戻って。」
「・・・・・・分かった。」
頷いて、あっさりと出て行った。

（・・・・・・一体なんだったんだろう・・・）

呆然とするレイリアの側、ベッドの傍らに膝をつき、セーヴィアスは申し訳無さそうに、僅かに微笑んだ。
「大丈夫だった？」
「え・・・」
思いがけず優しい声音に、レイリアは素直に頷いた。
「はい、あの・・・だ、抱きつかれました・・・」
思い返して恥ずかしそうにするレイリアに、セーヴィアスは苦笑した。
「・・・レイリア・・・ロシルが来なかったら、それ以上の事をされていたかも知れないよ？」
「あ・・・」
さあぁっ、と青ざめた。それを見て、セーヴィアスは思わず笑ってしまった。
「くくっ・・・、レイリアは本当に素直だね。」
「・・・・・・・・・」
（からかわれた？）
憮然としながらセーヴィアスを睨んでいると、すぐに笑いを引っ込めてくれた。
「すまない。・・・彼はラヴィアス。我々の仲間だよ。一番よく働いてくれている。」
（仲間・・・）
先程の、ロシルが来てからの様子を思い出して、レイリアはぞくりと身を震わせた。
（じゃああの人も・・・リリィみたいに怖い人かも知れないんだ・・

・）
恐る恐るセーヴィアスを伺い見ると、じっと様子を伺われていた。ぎくっとして目を逸らす。
（なんだろう・・・）
どきどきしていると、セーヴィアスが問いかけてきた。
「・・・朝食を食べなかったそうだけど・・・」
ぎくり、と身体が強ばる。
（ちょ、調子が悪かったって言おう。お昼は・・・）

「リリィと何かあった？」
「！」

思わずセーヴィアスと目を合わせてしまった。くすり、と柔らかく微笑まれる。
「レイリア。僕はイルア＝バルクスにも、君にも危害を加えるつもりはない。けれどイルアにレーヴェとして、そして闘い無しで会う為には、君が必要だ。」
「・・・・・・・・・」
相変わらず膝をついたままで、セーヴィアスは真剣にレイリアの目を覗き込んでくる。それを、怖さを必死に耐えて見返す事しか、レイリアには出来なかった。
「だから、レイリア。どうか逃げずに、一緒にいて欲しい。例えイルア側から攻撃があったとしても、反撃はしないと誓おう。」

反撃はしない。

その言葉にレイリアは反応した。まっすぐにセーヴィアスの目を見つめる。
「本当に？」
セーヴィアスは少しだけ緊張を解いた。

「ああ。反撃はしない。傷つける様な真似は、絶対にしない。」
その目は誠実だと感じられた。軽々しく口にした言葉ではない、と。
（でも・・・もし嘘だとしても、私には見破れそうもない・・・）
大体、敵がこうも条件良く取引をするのだろうか。けれどイルアに会いたいという理由を教えてくれた時も、今の誓いの言葉も、とても真剣な気持ちのように思える。
（分からない・・・イルア様。どうしたらいいですか？）
返る事のない答えを、ついセーヴィアスの瞳の中に探してしまう。
するとセーヴィアスは、返事を聞かずに立ち上がった。
「さあ、レイリア。お昼は食べるだろう？降りておいで。」
「あ・・・」
笑いかけて立ち去るセーヴィアスを見送り、レイリアは、怖さの薄れた心に気付いた。
（・・・怖いけど・・・イルア様にとって、悪い人ではないのかな・・・）
窓から見える空を仰いでも、答えは見つかりそうにない。諦めて、元気をつけなくちゃと部屋を出て食卓へ向かった。

セーヴィアス達は常に四人揃っているわけではなかった。レイリアが攫われて来た時もそうだったが、とにかく四人揃う、という事は少ないようだった。
数日様子を見ていたが、今も昼食の席にはラヴィアスとリリィしかいない。
「・・・貴方達は、四人一緒に過ごさないの？」
ずっと気になっていた事を訊ねてみると、ラヴィアスがあっさり答えてくれた。
「いつも一緒だろ？」

「え？」
驚いて聞き返すレイリアを見て、ラヴィアスが首を傾げた。つられてレイリアも首を傾げる。
「だって、ご飯を食べる時は、一人や二人しかいないじゃない？」
「・・・ああ！そういう事か。だって店番しなきゃいけないだろ。皆店からいなくなったらタダで持ってってくれって言ってるようなもんだからさ。それは出来ないよ。」
「・・・お店？」
今度は反対に首を傾げると、くすりと笑われた。
「そうだよ。なんだ、レイリアは知らないのか。」
言いながらラヴィアスがちらりとリリィを見るが、リリィは瞬いただけだ。なんで私に聞くのとでも言いたげだ。
「俺たちはシュル・ヴェレル。一応、商人なんだよ。」
「商人！？」
驚き過ぎてつい大きな声が出てしまったが、二人は意に介した様子もない。
「そ。」
「な、何を売ってるの？」
レーヴェと似た様な事をしてきたという人物が、一体まともな商売をしているとだろうかと不審に思って訊ねると、ラヴィアスはさらりと答えてくれた。
「んー、色々だよ。珍しい布とか石とか薬とか、花の種だとか？」
「・・・・・・」
（意外とまとも・・・？）
思いながら、別の疑問が浮かんでまた訊ねた。
「あの・・・貴方も商人なの？」
そうは見えない。リリィもだが。
「そうだよ？まあ俺は商人よりあっちのが向いてるけど。」
「・・・あっち？」
思わず覗き込むようにして聞くと、ラヴィアスはにこりと笑った。

「あっち。」
そして首を傾げる。
「セーヴィから聞いてないの？」
「・・・何を？」
「商人だって事も知らなかったんだろ？」
「う、うん。」
「・・・レイリアってさ、攫われてきたのにのんき過ぎない？」

「・・・・・・！」

言われて初めて、レイリアは状況のまずさに気付いた。
（私・・・怖がってばかりで、この人達が何者なのか知らない・・・！）
驚愕するレイリアを、今度はラヴィアスが覗き込む。
「教えてあげようか？」
ゆったりとラヴィアスの唇が弧を描く。それに魅入られたように、レイリアは頷いた。
「じゃあこれ片付けてからね。リリィ逃げるんじゃねーよ。ちゃんと片付けろ。セーヴィにチクるぞ！」
可愛いリリィが、舌打ちしたように聞こえた。こころなしかむすっとした顔で、すごすごと食器を流しへと持っていく。それに続いてラヴィアスとレイリアも片付け始めた。

「俺たちの噂、聞いた事ないかなぁ？結構有名だと思うんだけど。」

リリィが黙々と食器を洗い、レイリアがそれを拭き、ラヴィアスがそれを棚へ戻す。
「噂？」
「あのさ、シュル・ヴェレルだよ？ほんとに聞いた事ない？」
言われてレイリアは考え込む。

（シュル・ヴェレル・・・前にどこかで聞いたような・・・）
「あっ」
思い出した。
「聞いた事あるだろ？どんな噂だった？」
（イルア様から聞いたんだ・・・）
「・・・その一団が通ると、必ず小さな事件が起こるって・・・」
『だから、その一団が来たら屋敷から出ちゃ駄目よ。』
そう、言われていたのだった。
「まあ、その通りだよ。俺たちは表向きは商人だ。色んな物を売ってる。けど、それはあくまでついでで、その小さな事件ってのは本業の為の実験みたいなもんなんだ。」
ラヴィアスは特に面白がる風でもなく、そう言う。
「本業って・・・」
どくり、と心臓が嫌な音を立てる。
「え、それ聞いちゃう？」
呆れたように言われ、さらに嫌な予感を煽られる。
「まさか・・・」
にこり、とラヴィアスが楽しそうに笑った。その、邪気の無さ。
「レーヴェと一緒だよ。国の不祥事の処理とか、陰謀を阻止する為の暗殺。」
「・・・・・・！」
一瞬、目の前が暗くなった。セーヴィアスは今でも続けているのだ。
「けどさあ、イルアはやりにくいだろうね。」
イルア、という名前にはっと我に返る。慌てて食い付いた。
「ど、どういう意味？」
最後の食器を片付け終えて、ラヴィアスは不思議そうにレイリア

を見た。
「どういうって、イルアは自分の国に留まってるだろ？それに政治関係者とは顔見知りで仲が良いっていうし。」
「貴方達は違うの？」
驚いてそう聞くと、得意げに笑って答えてくれた。
「違うよ。俺たちは一つの国に留まらない。セーヴィに言わせれば、自分の国の人間とは関わりが薄くなるから感情移入も少なくなって、仕事がやりやすいって。」
「・・・・・・・・・」
（そっか・・・イルア様が関わっている人達は・・・例えばザクラス様みたいに、手をかけなきゃいけない時もあるんだ・・・）

もしかしたら、エルフィアやシールスでさえ。

ずきり、と胸が痛む。
（私・・・まだまだ知らない事が多い・・・）
イルアの事が大切で、その心を守ってあげられたらと思うのに。
（考えが至らない・・・）
胸が、痛くて。痛くて。レイリアはぎゅっと胸元を握りしめた。
「どうかした？」
はっとして顔を上げると、ラヴィアスが不思議そうに顔を覗き込んでいた。
「あっ・・・ううん、何も。」
慌てて言葉を紡ぎ出す。
「あの・・・貴方達が一つの国に留まらないなら、一体どこの国を守っているの？」
「・・・守るっていうのは、ちょっと違う気がするけど・・・皆国が違うんだ。」
（皆、国が違う？）
そのままじっとラヴィアスの目を見て待っていると、ラヴィアス

はにこりと笑って答えてくれた。
「そう。自分の国の依頼がきたら、そいつだけ国に帰って仕事するんだ。それで、また合流する。そうすれば殺す奴に余計な感情が沸かないだろって、セーヴィが言ってた。」
（・・・確かに・・・そう・・・なのかも知れない・・・）
誰かを殺すなんて恐ろしい事だが、レイリアの主人は、国を思ってそれを行っている。決して辛くないわけじゃない。とても、とても苦しんでいる。そういう対象となるかも知れない人達と顔を合わせる今の状態は、イルアにとってどれほど苦しい事なのだろう。
（だったら・・・その人達とは離れていた方が、イルア様の苦しみも減るのかな・・・）
再び胸元を握りしめて考え込んだレイリアの耳元へ唇を寄せて、ラヴィアスは囁いた。
「胸が痛むの？」
「えっ・・・？」
するりと背中に両手を回されて、レイリアは咄嗟に固まった。
「診てあげようか？」
すーっと右手が背中から前へと、ゆっくりと滑る。
「えっ・・・え？」
嫌な予感に硬直したレイリアをくすりと笑い、ラヴィアスの右手が肋骨を撫で上げようとした、その時？？。
ひゅん、とラヴィアスの首に糸が巻き付いた。
（これ・・・リリィの・・・？）
昨夜を思い出してぞくりとした。が、ラヴィアスは微塵も恐れを感じない様で、すぐにリリィへと視線を移し、唸った。
「リリィ・・・！テメェ・・・殺す！」

「！」
ぎらぎらと殺気を漂わせるラヴィアスに、リリィはびしっと言い返した。
「望むところ。」
「ええっ！？」
あまりの返答にレイリアが焦った。
「リ、リリィ！？そんな事・・・」
「バラバラにしてやろーか・・・」
ブチッ、とどこからか短剣を取り出し、それで易々とリリィの糸を断ち切り、ラヴィアスはリリィへと足を進める。
「リリィ！」
叫んだレイリアの声も空しく、リリィは決然と言い放つ。
「セーヴィの言いつけは守る。ラヴィがレイリアに淫乱行為出来ないように。」
「い、いん・・・」
（リリィ、その言葉どこで覚えたの！？まさかセーヴィアスさん！？）
色んな意味で慌て始めたレイリアをよそに、二人は額がぶつかりそうな距離で睨み合い始めてしまった。
（・・・・・・あ、二人とも同じくらいの身長・・・）
ちょっとだけ和んでしまいそうになりながら、慌てて二人の元へ駆け寄った。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3872y/

風の歌声　-シュル・ヴェレルの手招き-

2012年1月14日01時05分発行